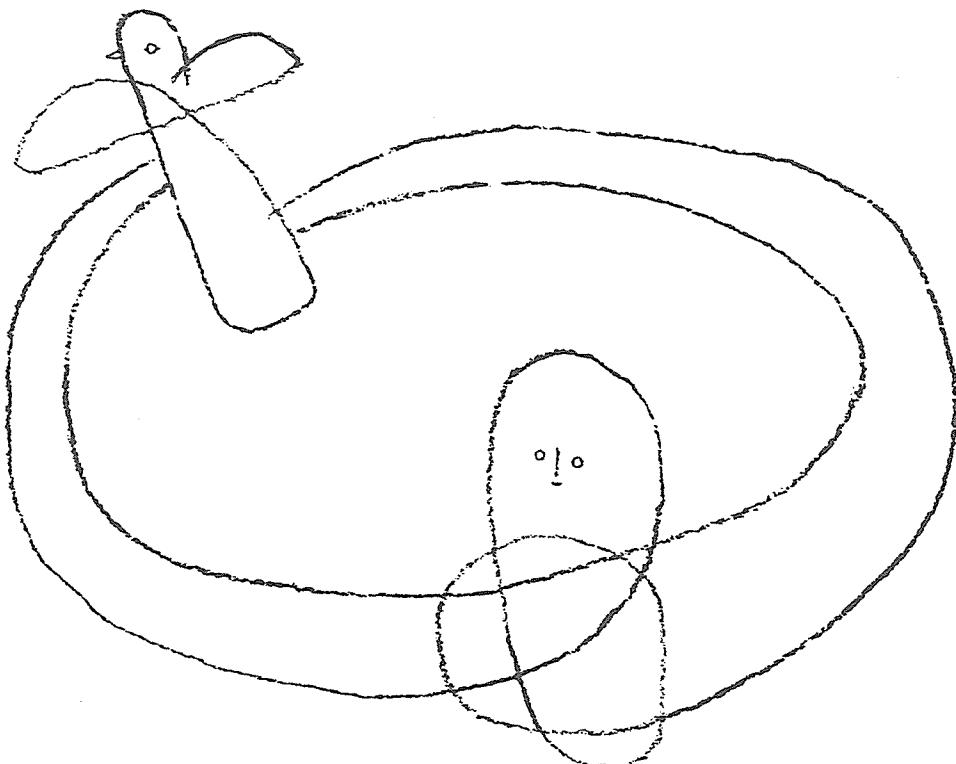


# 文書管理通信

No.26

1996年

5-6月



望月通陽

## 目次

### <特集>

- 阪神・淡路大震災の記録とその保存 —『忘れてはならない震災の光景』によせて— ..... 2  
尼崎市立地域研究史料館 白石健二

### <雑誌・新聞情報>

- 雑誌 ..... 14

- 新聞 ..... 22

### <編集後記> ..... 23

# 特 集

## 阪神・淡路大震災の記録とその保存 —『忘れてはならない震災の光景』によせて—

尼崎市立地域研究史料館 白 石 健 二

### はじめに

私は阪神・淡路大震災から2カ月余り経過した1995年4月1日から10回、居住地である奈良県生駒郡平群町で『忘れてはならない震災の光景』という防災啓発を目的としたビラを発行した。被災した職場のある兵庫県尼崎市と自分の住む奈良県との震災についての意識の差を痛烈に感じたからである。被災地の状況をモニターを通してしか見ていない人にとって、被災地は遙か彼方の自分とは関係ない場所としか思えないのかもしれない。「ボランティア元年」という言葉が造られたとおり、多くの志ある人々が震災を自分の問題としてとらえ被災地に駆け付けた。その一方で震災を「他人事」と考える向きは国をはじめ当初から感じられた。

震災から1年余りたった今、被災地外ではすっかり震災のことが風化してしまったように思える。しかし、復興が緒についたばかりの被災地では数多くの問題が山積したままである。そして、これらの諸問題はすでに多くの人々が指摘しているとおり被災地だけの問題ではなく、国として国民全体として取り組むべきものである。今、被災地の置かれている状況は、今後都市で大災害が起こった場合その地域がどういう状況に置かれるかを、そのまま示しているのである。震災は「他人事」ではない。

今回、編集室の益田宏明氏から『忘れてはならない震災の光景』を紹介する機会を頂いた。本稿では、震災の現実や経験の記録化、震災に関する記録の収集・保存について触れたのち、ビラ『忘れてはならない震災の光景』を紹介したい。なお、ビラの掲載にあたっては紙幅の関係もあり一部割愛した。

### 1 震災関係記録の発生

震災以後、様々な記録が発生した。試みに目的で分類すれば以下のようになるだろうか。

- ① 緊急情報を主とした被災者向けの情報や被災地外に被災の状況を伝えるもの、その他緊急性を帯びた意志表示物。駅前や避難所で配布された営業中の店を書いた地図や避難所等に掲示された自治体のお知らせ、無料電話やボランティアの案内、被災家屋の前に書き残された避難先の表示など。情報が伝えることが最優先で、その内容も緊急かつ流動的な情報が多いため、新しい情報が入り内容に情報としての価値がなくなれば通常廃棄される。特に意識的に収集しなければ残らない。
  - ② 各種行政文書・行政資料や避難所の日誌、企業・団体の記録、新聞のスクラップなど業務上の必要から作成されたもの。
  - ③ 新聞・テレビ画像・自治体広報紙・ミニコミ紙などの広報・メディア。
  - ④ 被災者やボランティアが自らの記録としてまた広く教訓として活かすこと目的として作成したもの。
  - ⑤ 記録として残すことを主目的としたもの。シンポジウムや集会等の記録集、被災史料救出活動記録、鉄道不通時の列車アナウンスを収録したCDなど。
  - ⑥ 営業を目的としたもの。被災地の電柱に貼られた不動産広告など。
  - ⑦ 研究・分析のための資料及びその成果。被災状況地図や地震の前兆証言集など。
- 以上の分類でとらえることができないものも含め、震災関係の記録は、一次的から間接的なものまで、形態・性格・目的も多種多様であり、その量は膨大なものである。

これらの記録の発生過程を模式化すると資料1のようになるだろう。

(0)「原情報」とは、「○市△町□番地の×マンションの被災状況」といった現実、「Aさんが被災して避難所に避難した時に得た」経験、意見や印象・意志・感情・感想といった精神的なもの、「△月☆日に仮設住宅の募集が始まる」といった予定や予想・推測など不確定要素を含む事柄など、記録化以前の情報を示す。これらを文字や記号（コンピューターなど）、音声、映像などで「記録化」したものが、(1)「一次記録」である。「原情報」はその場に行かなければわからない現実そのものと個人レベルや団体内部限りの情報といえよう。「原情報」が記録化されることなく人の口から口へと語り継がれるのが噂である。

(1)「一次記録」は個人の日記、避難所運営やボランティア活動の直筆記録、メモ、被災した街の様子を写した写真やビデオ、テレビの生中継、地震計の生データ、代行バスの案内をする列車アナウンスを録音したテープなど「素材」としての記録である。

さらに「原情報」「一次記録」を集約・編集・分析・評価・検証したものが「間接的記録」といえよう。このうち緊急的・限定的刊行物や文書を(2)「二次記録」、「三次記録」を取り入れるなど広く一般向けに刊行されたものを(3)「三次

記録」とする。「二次記録」は、避難所等で配布された自治体の広報やビラ、営業を再開している店を書いた地図、ボランティアからのお知らせ、ミニコミ紙などである。先述の①分類が主に含まれる。「三次記録」に比べ「二次記録」は記録として残りにくいため「刊行物」であっても「素材」と見るのがむしろ適当だろう。

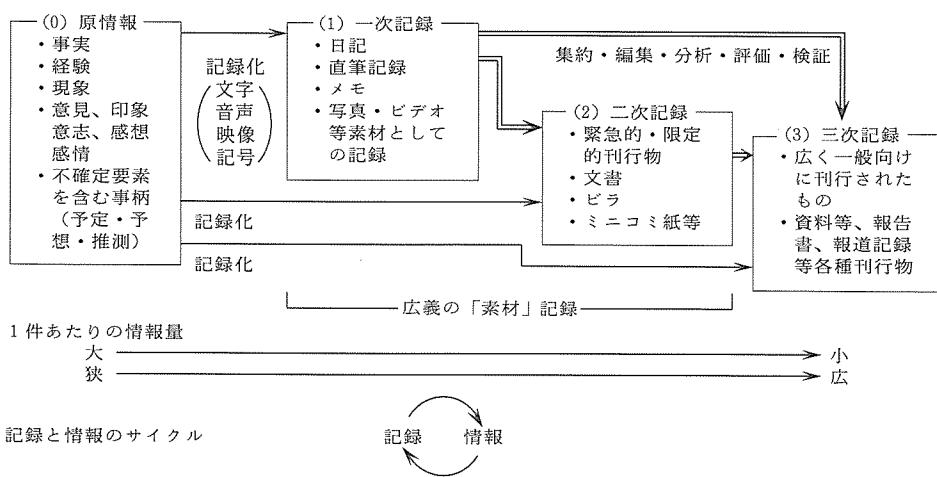
もちろん実際にはこの図で表されるほど震災関係記録の構造は単純ではないだろうが、1つの案として提示したい。

1件あたりの情報量は(0)から(3)に向かう過程で、他の情報と集約され減少するが、より広く伝わるようになる。もちろん捨象されて伝わらないものもある。その意味で、広く刊行されない(0)(1)(2)は(3)に比べより多くより直接的な震災関係情報を含んでおり、これらを残すことがより重要となってくる。「原情報」を「記録化」した「記録」を「情報源」として次の「記録」が生まれる。この「記録」と「情報」のサイクルにより記録は次々と発生し続けている。

## 2 記録の作成と収集の動き

震災直後は先述の①分類の緊急情報が卓越していた。刊行物も報道関係のものがほとんどだったが、1カ月後の1995年2月後半頃から④⑤分類にあたる記録作成の動きが活発化した。3月には本屋の店頭に並ぶ震災関係図書が爆発的に

### 資料1 記録の発生過程



増加した。自費出版も含めた図書、広報・雑誌等逐次刊行物、ミニコミ紙などのほかビデオ・カセットテープ、CD、CD-ROMなど様々なメディアを通してこれらの記録は増え続けている。「素材」としての記録についても同様である。

この爆発的な記録を作成させた原動力は「震災の教訓を活かすため記録を残そう」「自分たちがその時どうしたかを伝えよう」「復興のため記録する」といった意識であるといえよう。その中で、これらの記録を収集し、後世に残そうという動きが出てくるのは実に自然な流れともいえる。史料保存施設は勿論のこと、図書館、行政、民間団体、ボランティア等多くの動きがある（詳しくは拙稿「忘れてはならない大震災の記録を後世に伝えよう」『全国歴史資料保存利用機関連絡協議会会報』第35号所収、1995年2月発行を参照）。

図書館では、郷土資料の一環としてビラ・ミニコミ紙等を含めた震災記録を収集・公開する動きがあり、すでに兵庫県立図書館（フェニックス・ライブラリー）や神戸市立中央図書館、神戸大学附属図書館（震災文庫）などでは、整理できたものから順次公開している。図書館司書有志を中心とした「震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク」も啓発を続けている。

行政では、「復興誌」として震災の被害や復旧・復興の過程、体験などをまとめる動きがある。兵庫県では10年の復興計画に合わせ復興誌を10年間の集大成とする計画で、外郭団体助成21世紀ひょうご創造協会が資料を収集している。西宮市では行政資料室が編纂のための資料収集にあたっている。

ボランティア団体では、地元N G O救援連絡会議文化情報部が、1995年4月に震災記録の収集を開始、8月には連絡会議から独立し「震災記録情報センター」に改組、様々な震災記録に関する情報の集約、調査、連絡調整を行っている。また、同年3月末に同じ連絡会議内にボランティアが自らの記録を残そうという趣旨で「震災・活動記録室」が発足。記録収集とともに

積極的にボランティアへの取材活動を展開するなど記録の作成にも力を入れている。9月には連絡会議から独立した。連絡会議も記録室も恒久的な組織ではないため、収集した資料は順次神戸大学の震災文庫へ移管されている。

歴史資料保全情報ネットワーク（通称「史料ネット」）も阪神・淡路大震災に関する諸記録・資料の収集・保存に向けた取り組みを長期的活動の重点項目としてあげている。このほかミニコミ紙収集を中心としたまちづくり団体の動きなどがある。

また、私の勤務する史料保存施設尼崎市立地域研究史料館では、従来からビラ・チラシ・ポスター・ミニコミ紙・地図・写真等現在作成されている史料も収集しており、震災関係記録もその一環として収集している。

### 3 行政文書・資料の収集と経験の記録化

震災関係記録の収集は、震災の現実や経験を分析・総括し、その教訓を被災地の復興に活かすとともに後世に伝えるという目的から、当然にこれらの記録の整理・公開と保存措置が必要となる。

図書館やボランティア団体により、民間の震災記録はある程度収集・保存され整理の済んだものから公開されているが、行政文書・資料についてはどうだろう。

義援金や税の減免、建物調査、ライフラインの復旧・復興関係など震災関係の行政文書・資料は震災の現実と経験をきちんと分析・総括し、今後の復興と防災都市を建設するための基礎資料となるが、文書台帳に登録され一斉に廃棄される行政文書のみを収集するだけでは十分とはいえないだろう。日頃行っている文書事務の実感からも、正規の文書にはなかなか率直な意見や詳細な事実経過などが記録されず、むしろ登録文書外の内部検討資料、所管課の事務用資料や個人持ち資料などに綴られる場合が多いと思われるからである。

これらの行政文書・資料と史料保存施設・図書館やボランティア団体が収集した各種記録をあ

わせ活用することによって、初めて震災の全体像を浮かび上がらせることができる。これらの文書・資料は将来的には広く公開し利用に供していくことが必要だが、そのためにはプライバシーの問題や情報公開制度との調整、公文書館等これらの記録を保存・公開する施設の設置など数多くの課題をクリアしなければならない。

さらに行行政職員の経験の記録化も考える必要がある。避難所や家屋の被害判定調査、義援金の交付等に際して、対応が不十分であったりトラブルとなった経験などは個人レベルで語られることはあっても文書や資料に記録化されることは通常ない。しかし組織にとっては記録に残したくないようなマイナスの経験こそが総括され今後の教訓とすべき内容を含んでいるのではないだろうか。職員の体験記録は、消防・警察・水道など特定の組織については、まとめられ刊行されてきているが、市民窓口ほか一般職員の体験記録はまだ僅かである。

現在被災地の自治体は文書館行政が貧弱であり、復興誌編纂も史料保存の視点を欠いたまま進められる可能性がある。民間資料はすでに図書館などにより収集・保存・公開されてきているが行政文書・資料については、一部の自治体を除いてほとんどが手つかずのままといえよう。

その中で、1995年11月29日・12月15日、歴史研究者・史料保存関係者有志が集まり震災記録保存についての会合が持たれ、震災から1年後の1996年1月17日、阪神大震災対策歴史学会連絡会主催で「震災記録の保存を考える研究会」が開催されたのは一つの前進である。

また、復興誌編纂と震災関係資料の収集、震災関係資料情報のネットワーク化を目指す21世紀ひょうご創造協議会は2月22日に民間資料収集について図書館等と連絡会議を開催、翌23日には、創造協議会と阪神大震災対策歴史学会連絡会(史料ネット)主催、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(略称「全史料協」)後援で「震災資料の保存と編さんに関する研究会」が開催された。

この研究会は、復興誌の編集と震災記録の収

集・保存について、被災自治体(担当者の個人参加が多い)と歴史学会・史料保存関係者が初めて公式の場で会合したものでその意義は大きい。まず資料収集を開始したばかりの21世紀ひょうご創造協議会の収集方針が同協会地域情報センター長北岡孝統氏から、すでに復興誌の1996年度発行に向けて着実に作業を進めている西宮市の取り組みが同市行政資料室安田雄一氏から報告され、桃山学院大学経済学部教授芝村篤樹氏から震災資料の保存と編纂の意義と課題、全史料協から大西愛氏が震災資料の保存と整理に向けて報告と提言を行った。報告終了後、各自治体の事例報告や意見交換が行われた。被災地内でも震災記録についての意識に差があり、その収集・保存の取り組みにも差が出ている。これをいかに被災地全体の動きとしていくかは今後の大きな課題の一つだろう。

また、日本では行政文書・資料を歴史資料として保存し公開するといった意識が低く、当然これらを収集・整理・保存・公開している施設も少ない。行政内でもまだその必要性は十分認知されていない。

さらに膨大な量の民間資料についても、従来から歴史資料として現在のピラ・チラシ・ポスター等を収集・保存している施設は極めて少なくノウハウも蓄積されていない。

被災地で今後取り組むべき、震災記録の収集・保存は現実にはほとんど未開拓の分野といつていい。これを押し進めるにはかなりの困難を伴うが、震災から真に教訓を得るためにには最低限必要な作業であり、震災記録を後世に伝えるためにも今動くべき時期だろう。

冒頭でも触れたようにこれらの問題は被災地だけの問題ではない。震災記録の収集・保存は、国が震災の教訓を抽出するためにも必要なことである。財政の逼迫した被災自治体が、これらの資料を収集・保存し、震災の現実と体験を記録化できるよう、国による人的・財政的・技術的な裏付けのある支援の方策は考えられないだろうか。



# 忘れてはならない 震災の光景

## 〈解説〉

『忘れてはならない震災の光景』は、1995年4月1日から6月26日まで合計10号発行した。創刊号～第5号は150～200部発行し、平群町役場、中央公民館、郵便局、ショッピングセンター等に置いてもらいたい配布した。臨時号1～5は60～100部発行し、町内の知人のほか全史料協近畿部会例会等の機会に配布した。概して地元や近畿では関心が低いためか反響は少なく、むしろ関東方面の知人から反響があった。

## 【創刊号・1995年4月1日発行】

希有の大災害阪神・淡路大震災をもたらした兵庫県南部地震から2カ月半。改めて被災したすべての方々にお見舞い申し上げます。

復興に立ち上がる被災地の鉄路日本の大動脈東海道本線が営業を再開しました。奈良は被災地から離れていることもあって震災直後でものんびりした雰囲気が漂っていた感じがしましたが、あなたはいかがでしたか？震災からわれわれが学びとらなければならないことは山ほどあるはずです。行動するのは他人ではなくわたしたち自身です。

## 〈0〉前章

今年頂いた年賀状にこういう文面のものがあった。「昨年は本当にいろいろとありがとうございました。(中略) ところで年末年始の東北はコワかったです。三ヵ日ずっと余震が来っ放しでした。」

これは埼玉県在住の同業者(歴史資料保存公開施設職員)から頂いたもので、彼の故郷は盛岡市だった。「余震」とはいうまでもなく昨年12月28日に起こった三陸はるか沖地震の余震のことである。

私は以前から環境問題・自然・景観・地学・鉄道などに興味があるので、これらに関する新聞記事をスクラップし続けている。「災害関係記事」スクラップファイルの中にも近畿地方で直下型地震が発生する可能性があるという記事があり、私自身も「いずれ近いうちに来るかも知れない」と考えていた。ここは生駒断層と平群断層に挟まれた土地であり、地形的に見ても危険な箇所が多い。休みの日に趣味で平群・生駒の里山歩きをしているうちに周囲の地形や土地利用、交通遮断時の歩行路も自然とわかるようになってきた。

だが、はっきり言ってこんなに早く来るとは思ってもみなかった。

## 〈1〉平成7年1月17日午前5時46分

いつもは6時過ぎに目が覚めるのにその日はなぜか5時30分頃に目が覚めた。ぼーっと布団のなかに居ると部

屋が揺れだした。結構長く感じた。ガラス戸が震えたが、何も落ちてはいなかった。時計を確認すると午前5時46分。すぐにまた眠っていた。その頃阪神・淡路地域で未曾有の大災害が発生しているとは考えもつかなかった。

その日は火曜日、私の勤務する尼崎市立地域研究史料館は休館日である。午前7時に起きるとすでに震災の模様はテレビを通して報道されていた。落下した鉄道・道路の高架橋、燃え上がる神戸の街、倒壊した家屋、大惨事はさらに拡大しつつあった。職場には電話は通じない。環状線も大阪地下鉄・阪神電車も動かない。神戸は震度6、奈良は4。テレビを見ていると奈良で震度4の余震があった。

兄は桜ノ宮にある会社まで鶴橋から歩いていった。私は尼崎から連絡が入る可能性、余震または奈良に別の震災の可能性ありと見て家で待機。途中パンを買いに出たが、外の天気は快晴。テレビのなかの惨憺たる映像との落差が印象的だった。尼崎市の様子はほとんど報道されていない。この日の報道では死者はすでに1,000人を超えていた。

## 〈2〉被災した職場

翌朝、休止していた鉄道は被災地区を除いて営業を再開はじめた。JR神戸・宝塚線は塚口まで、阪神電鉄は甲子園まで営業を再開。近鉄生駒線と奈良線は震災などまるでなかったような通常のラッシュ。そのなかを一人非常食等緊急物資を詰め込んだリュックを背負い尼崎へ。環状線に乗ると運動着にリュック姿の人も見られた。天満・大阪間では青いビニールシートをかけた屋根が見られた。

阪神電鉄は急行と普通のみ甲子園まで運転。西淀川区・尼崎市内の車窓からも屋根の破損など被害が目立った。

報道では尼崎の様子はほとんど伝わってこない。1月17日当日の報道は神戸市・西宮市・北淡町など被害激甚地に偏っていたので尼崎がどういう状態なのかわからなかった。阪神尼崎駅を降りると思ったより被害は少なく見えた。駅北側のいつもの通り道。商工会議所の窓ガラスが割れ、オフィスビルの石段が破損、コンクリートが浮き沈みし、ガラス張りのクレジット店の窓が粉々になっていた。市の中心部を流れる庄下川に架かる国道2号玉江橋の東側、総合文化センターは一見無事に見えたが、3階の厨房から水が漏れ1・2階の一部が浸水し、当然エレベーターは使えない。壁にはX字のひびがいくつも入っている。

階段を昇り7階の市立地域研究史料館へ。西宮市の武庫川団地在住の館長がすでに到着していた。館内は足の踏み場もないほど物という物が倒れ、ぶちまけられた蔵書、割れたガラスの破片、ねじまがった書架、壁にめりこんだロッカー、物が倒れ扉が開かず入れない部屋が書庫など3室……。

茫然とした。その日出勤できた館員は9名のうち4名。館長を除いて職場から東の方に住んでいた職員以外は出

勤できる状態ではなかった。それどころか消息もわからない。

全員の消息が確認できたのは震災から2日後のことだった。

### 【第2号・1995年4月18日発行】

震災から3カ月。地下鉄サリン事件やオウム真理教事件等により震災の現実が風化しつつある現在でも5万人からの方々が避難所暮らしを余儀なくされていることを忘れてはならない。

#### 〈3〉被災職場の復旧

1月18日、被災した私の職場尼崎市立地域研究史料館では出勤できた職員4名で復旧作業に着手した。館内は足の踏み場もないほど物という物が倒れ、本や史料・文書・備品などが床にぶちまけられ、机の上に敷いていた板ガラスは碎け、書架はねじまがりところどころ溶接が破断していた。ロッカーは壁にめりこみ、物が倒れ扉が開かず入れない部屋が書庫・貴重文書庫など3室。

まず事務室から着手、入口から散乱していた史料や備品を掻き出し通路を確保しつつ倒れている書架やロッカーを立てなおす。書架の直撃を受けたパソコンを救出。OAデスクの上の段にあったモニターはボディに小さなひびが入り、プリンターは破損。本体は下の段にあったので傷ひとつなかつたが恐る恐る起動させるとちゃんとハードもデータも無事だった。こういったことをくり返し、まる一日かけて事務室の通路を確保した。

夕方には非常口から初めて書庫に入る。心配していた振動によるスプリングラーの誤作動はなかったが、全ての書架は倒れ史料は散乱状態。その日以来史料館の復旧作業は約1カ月間続いた。来館者が直接史料を利用する開架閲覧室の復旧を最優先し、1月26日には被災により多くの史料が探し出せないという限定付きながら閲覧業務を再開した。館員9名のうち6名が何らかの形で被災、全員が出勤できたのは同じ1月26日のことだった。

#### 〈4〉地震動の痕跡

書架を立て直していると、地震の凄まじい力の痕跡を発見して愕然とすることがある。蔵書や研究紀要などの史料がぎっしり詰まった重い鋼製の書架は、まずは激しい上下動で宙に浮き、水平方向の搖れであちこちの方向(特に南北方向)に倒れ、並んでいた史料は床にぶちまけられ、その上に書架が落下したと思われる。書架が浮いている間にその下に散乱した史料の中には書架の柱の直撃を受けて深くえぐられたものもある。このようにして破損し補修対象となった史料は約300点。一見、あまり動いてなさそうでも床や天井にぶつかった跡がついている。その一方で閲覧室にある蔵書を並べたワゴンは地震動に応じてコロが動いたためか全く別状なかった。

#### 〈5〉見舞・激励・支援

今回の震災では、全国全世界から被災地に向けて暖かい援助の手がさしのべられた。被災自治体の職員の一人として改めて感謝御礼申し上げます。

平群町においても、1月19日に共産党が駅前で募金を開始したのを皮切りに社会党・労働者協議会・無所属議員・青年団など各種団体・個人が、それぞれの形で被災地への支援を展開した。

当史料館でも実に多くの方々から暖かい見舞と激励と支援を頂戴した。各地の歴史資料保存施設や自治体史等編纂室、研究者、関係者、利用者、元職員など。實に有り難かった。19日には全史料協(全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、歴史資料保存施設をはじめ歴史資料を後世に残していくと考える組織および個人の全国組織)近畿部会有志から災害復旧支援の申し出があり、以後2月中旬までの主に土・日曜に各地の史料保存施設、市町村史編纂室等からボランティアで書架等の移動・解体、史料の搬出・選別・配列・梱包などを手伝って頂いた。これらの作業には人手を要するので、大変助かった。このほか尼崎市在住の史料館の常連さんは、見舞いがてら本の配架を手伝って下さり、避難所へもボランティアに行っているという西宮市の女子高生には本の分類と配架を手伝って頂いた。これらの尊い支援が被災した館員をはじめ職員にとってどれだけ励みになったことか。改めて感謝申し上げたい。

#### 〈6〉 デマ

今回のように、自然災害などにより瞬時に予想外の大被害が広い地域で発生した場合、交通・通信の途絶、電気・ガス・水道などのライフラインの破壊などにより極度の情報不足に陥る。行政からの情報発信も役所自身が被災した場合十分機能できない。朝日新聞に掲載された尼崎在住の漫画家尼子騒兵衛氏の痛烈な行政批判漫画がそれを物語っている。

いやおうなしに口コミが重要な伝達手段となり、何人の口を経ているうちに内容がどんどん変容していく。その結果さまざまな憶測・デマが飛びかかった。

有名なのが、「何時何分また神戸で地震が起こるらしい」というもの。冷静に考えればこんなことを予想できるわけがないのだが、みんな尋常の状態ではなく、相次ぐ余震がさらに恐怖と不安を倍加させたため、あつという間にひろがったという。しかし、このデマの原因はさるワイドショーで占い師が次の大地震を予言したということが被災地に伝わったため起きたらしい。こういった被災地を無用の混乱に陥れるような企画はやめてほしいものだ。

この他、「明石架橋が地震の引き金になった」「仮設住居は先着順」「次は奈良と和歌山が危ない」など私が聞いただけでも実に様々なものがあった(興味ある方は、株式会社ニューズワーク阪神大震災取材チーム著『阪神大震災で乱れ飛んだ噂の検証 流言兵庫』1995年6月硯文社発行をご覧頂きたい)。

## 【第3号・1995年5月2日発行】

震災から100日を過ぎた今、震災をふりかえる

### 〈7〉人の心

今回の震災では、全国全世界から被災地に向けて暖かい援助の手がさしのべられた。被災自治体の職員の一人として改めて感謝御礼申し上げます。

震災を機に入と人とのふれあいが戻り、市民による人命救助、助け合い、全国全世界からの援助・ボランティア、義援金、言い尽せない悲しみを乗り越えて立ち上がる人々、食べ物や物資・サービスを無料・廉価で供給した被災地の商店、そして自らも被災しながら不眠不休で働く警察官・消防士・医療・福祉関係者・自治体職員・報道機関・地元企業、電気・ガス・水道・下水・電話・鉄道・港湾・建設等あらゆる地域復旧・復興関係者、自衛隊……。とてもこの場で書ききれないほどの多くのあらゆる人々が不幸に満ちた被災地で懸命に働いた。生きた。

だが、人のすばらしさをこれほど感じることができたその一方で残念なことも多い。まず政府の対応の遅さ。いわゆる初動ミスとしてあちこちで非難された。被災自治体も大いに反省すべき点は多い。その渦中で自殺者と過労死を出したのは大変悲しいことだ。

そして、許しがたいのはこのような限りなく不幸な状況下の被災地で被災者をさらに苦しめる数々の行為が現実に行われたことである。遠方からボランティアに駆けつける人がいると思えば、わざわざ大阪などから救援物資を運ぶ車に紛れて被災地に侵入しアコギな商売をする者がいる。火事場泥棒も横行した。被災者がやむにやまれず生きるために失敬したというのではなく、わざわざよそから復旧車両らしく見せてやってきて被災地外への緊急避難・引越と見せかけて運びだすなど。果てはえせ建築物危険度判定士やら赤十字等の名を語ってのえせ募金、土地・建物・借地権などにまつわる詐欺など、よくここまで人の不幸につけこむことができるなと怒りを禁じえない。

マスコミ、わけても被災者の気持ちを軽視するような興味本位のワイドショー風の取材が被災地で大ひんしゅくを買ったのも当然である。報道のヘリが生き埋めになった人の声をかき消したことでも事実である。東京から状況観察にきたという某国会議員は県庁に来たとき「出迎えがない」と怒ったという。いったい何にきたのか。

今回の震災で何をしたか、どういう行動をしたか、それはその人の心そのものを反映しているといえないか。

### 〈8〉意識のズレ

震災直後から被災した職場の復旧作業に通うなか私が感じたことは、大阪や奈良での関心の低さである。すっかり「他人の街」に感じられた。震災直後あちこちで防災セットがバカ売れだったが、実際に生活や意識を改め

た人がどれだけいるだろう。

平群町内の某コミュニティ紙3月号の「俯瞰図」という欄の「日本にはえらい学者先生達が大勢いた筈だ。なのに誰も関西での地震を予知も警鐘もしてくれなかった。活断層なるものが、足元を走っている事も初めてしらされた。」というくだりが、防災意識の低さを物語っている。この記事は明らかに事実誤認である。関西での地震は京大の尾池和夫教授や九大（当時）の松田時彦教授らが以前から指摘しており、新聞にも記事が掲載されている。活断層は有名な生駒断層が生駒山地の大坂側を走っている。平群断層もある。

「関西では地震は起きない」という何の根拠もない思い込みが、今回の震災の被害を拡大させたひとつの原因でもある。

4月20日の朝日新聞の家庭欄に広告代理店の大広による「震災体験と生活感の変化」調査の結果についての記事が掲載してあった。それによると、神戸・阪神地区では、回答者の過半数が「今後、生活の何かが確実に変わる」と答えているが、大阪・京都地区では「生活が変わる」と思っているのは3割未満、「変化は当初だけですぐ元に戻る」「変化なし」がともに3割を超えていたという。

概して被災地では「物欲がなくなった」「モノは豊富でも無駄が多くなった」「当たり前の生活は当たり前ではない」といった物質偏重の生活や無駄使いに対する反省や感謝の声が多かったようだ。大阪・京都では「地震に對して無警戒すぎた」など生活そのものへの反省は目立たないという。

食べ物がある（農業・漁業・店・流通）。電気がある（テレビ・冷蔵庫・こたつ・電子レンジ・洗濯機・掃除機）。ガスがある（湯・風呂・ストーブ）。蛇口をひねれば水が出る（飲料水・風呂・洗濯）。下水道が通常に機能している（水洗トイレ）。交通機関が動く（鉄道・バス・船舶・飛行機）。安全である（警察・消防・自衛隊）。情報がある（電話・テレビ・ラジオ）。物がある（メーカー・流通・店）。精神的肉体的に健康である（福祉・保健）。働ける（職場・企業）。自治体の運営（住民・議会・自治体）各種サービスを受けられる（サービス業）。文化活動ができる（文化施設・団体・道具）などなど。

一見当たり前のこれら私たちの日常生活は実に多くの人々によって支えられていることに改めて気付かされる。これらが当たり前でないことを今回の震災は痛切に物語っている。

あなたがもし、5,500余名の犠牲を出した今回の震災から何も学ぶことなく何の備えもしなかったとしたら、あなた自身が災害による被害を現実に受けた時に誰を責めることができよう。

## 【第4号・1995年5月16日発行】

震災から4ヶ月 風化させてはいけない 現実がある

#### 〈9〉尼崎市における震災の被害

尼崎市は兵庫県南部地震の震源地から離れており、また現在のところ断層も見つかってないからか、被災地の中ではまだ軽症の方だった。それでも被害は決して小さなものではなかった。しかし尼崎市の被害については、新幹線の高架橋の落下現場を除いて全国的にはほとんどといっていいほど報道されていないように思える。

尼崎市における主な震災の被害を記す。死者27人。火災8件。負傷者6,600余名。被災家屋約35,000世帯。避難者ピーク時（1月18日午後8時現在）9,494人。道路・橋梁陥没等の被害42件（いずれも掲載当時）。

尼崎市の被害について、具体的にみていくと断層の延長線上にあたる武庫地区北部とその近辺、地盤の液状化が激しかった南部の築地地区とその周辺、海・湿地・池等の埋立地、市内各地に点在する文化住宅等の木造家屋密集地域が主な被害地域として浮かんでくる。

震災当初はとにかく職場（尼崎市立地域研究史料館）の復旧作業で手いっぱい。とても市内の被害状況を実際にこの目で見にいくどころではなかった。通勤経路と史料館本館と分室の間の経路だけである。私が初めてこれ以外の場所を訪ねたのは1月28日の築地地区だった。

#### 〈10〉カメラマン

被災地で、報道カメラマンがシャッターを切る。「なにとっとんねん！」怒号に涙ながら「すいません」といながらこの重い現実を一刻も早く伝えようと懸命に走り回った記者がいた。

いくら使命とはいえ、被災地を撮影することは気がひける。はばかられる。それは私も同じである。

当史料館では日頃から市内の風景・催し等を歴史資料として記録するために撮影している。市内の被害状況がほとんど報道されないなか、私が撮らなければ尼崎の具体的な被害状況が後でわからなくなるかも知れない。少々大げさかも知れないが、歴史資料としての景観というものは常日頃から気をつけていないとあっという間に消え去ってしまう。

1月28日の築地を皮切りに、避難所勤務の帰りなどに少しずつ市内の被災状況を撮影した。壊れた家屋は、次に通った時には撤去されていることもしばしば。とはいえたが、被害家屋の撮影は決して気分のいいものではない。ここにいた人はどうしたのだろう。それを思うと……。

震災直後の混乱が少しずつ落ち着いてきた2月頃になると各地から三宮の傾いたビルや中間階のつぶれたビル、長田の焼け跡、生田神社など「震災名所」を物見遊山風に訪れ記念撮影などする人が多かったという。何のために写すのだろうか。より衝撃的な光景を求めて何を写すのだろう。

#### 〈11〉マイカー

今回の震災では、マイカーが緊急車両の進路を妨害し

て進めないといった事態が多く発生した。非常にマイカーは禁物である。壊れた家や倒れたビル・高架橋だけでなく放置した車両も道路を塞いだし、大渋滞により緊急車も詰まっている。マイカーによって助かった人もいただろう。しかし、その一方でマイカーのために緊急車の到着が遅れ亡くなったりもいることを忘れてはならない。

私はマイカーを持たない。免許も取ろうとは思わない。公害のもとだし、私の家はマイカーがないと困るほどの所でもない。少々不便かも知れないが、健康のためにも公共交通と歩きで済ませている。

文明の利器といえば聞こえはいいが、戦争以上に多くの死傷者を生産し続けている非文明的な凶器とも思える。毎日通勤する緑ヶ丘方面から元山上口駅への細い道。ラッシュ時ともなれば、多くの人がここを通る。その中を人波を縫うようにして走るマイカー。高校生を駅まで送ったり、帰りはこどもや学生、家族を迎える。多くの人が歩いていているなか、まるでわがもの顔で道路をのし歩くマイカー。マナーの悪いドライバーも多い。自分が楽をしている分、歩行者に排気ガスを吸わせ、環境をどれだけ悪化しているか考えてほしい。もし排気ガスが外にではなく車内に噴出するものだったらどうだろう。1分と車内におれないはずだ。それだけ毒性をもつものを他人に噴きかけて平気なのか。尼崎や西淀川公害訴訟の原告団の人間が何人亡くなったりと考えて欲しいものだ。

#### 【臨時号1・1995年5月23日発行】

#### 〈12〉史料館分室の惨状（割愛）

#### 〈13〉それぞれの被災

史料館員9名（職員5名、嘱託員4名）全員今回の震災では無事だったが、うち6名が被災した。

西宮市の武庫川団地に住む館長は、震災の当日交通機関がマヒしているなか、尼崎市の職場まで自転車で駆けつけてきた。休館日の火曜、被災した職場にただひとり。他の館員は出勤できなかった。館長の自宅のガス・水道はしばらく復旧せず、尼崎で風呂に入つて帰ることもしばしば。尼崎では震災後しばらく神戸や西宮から風呂に入りに来る被災者で銭湯が繁盛していた。

震災後の数日間は、被災しなかった係長2人（高槻市・川西市在住）と私で、多い日におにぎり・弁当などを作つて持つていて、館長も含めた4人で昼食を頂いた。被災した史料館の復旧作業は主に肉体労働。史料館の入っている尼崎市総合文化センターは電気・水道・ガスなどのライフラインは無事だったものの、しばらくは近所に開いている店も少なく、エレベーターも止まったままだった。

伊丹市在住の嘱託員Yは、震災時部屋のタンスの上にあった折畳み式の机やラジカセが身体の上に落ちて青あざができる。近所に住んでいる大阪証券取引所の職員は、交通の途絶した震災の当日伊丹から北浜まで歩いたという（結局その日の取引は中止された）。

西宮市の甲東園付近に住む嘱託員Tは、新しいマンションに住んでいたので、外観上被害はほとんどなかったが、本棚が寝室に倒れてきたという。隣の家は1階が押しつぶされ全壊だった。飼っていた猫は恐がってなかなか出てこなかっただといふ。窓からは新幹線の高架橋が落下しているのが見えた。

尼崎市内に住む嘱託員Mは、自宅の寺に被害を受けた。その日たまたま早朝に起きていたMの兄（寺の副住職）は地震前に空が光るのを見たということだ。

阪神高速道路の一本足橋脚が折れて横倒しになった神戸市東灘区深江南町に住む嘱託員Iは、住んでいるマンションに被害を受け、母とともに祖母を背負って5時間歩いて、川西市の親戚宅まで避難した。マンションの室の玄関扉が閉まらなくなつたため、盗難防止のため近くの号室の人たちと声を掛けあって外出していたといふ。

明石市在住の職員Tは、自宅屋根・壁等に被害があり、交通途絶のためしばらく出勤できなかつたが、1月末前に当面の生活用具を持って加古川・西脇市・三田経由で尼崎入りし市内の親戚宅からしばらくの間通勤した。

神戸市垂水区にある私の親戚の家も、東灘区の前館長の家も被災した。尼崎市内の食満付近でも新幹線の高架橋が落下したが、落下現場にほど近い親戚宅は無事だった。この辺りでは周辺の住宅への被害が少ないのでなぜか高架橋だけが落ちた。

### 【臨時号2・1995年5月28日発行】

〈14〉液状化のひどかった築地地区（割愛）

### 【臨時号3・1995年6月3日発行】

43人の犠牲者を出した雲仙普賢岳大火碎流より4年  
雲仙・奥尻・釧路・八戸・新潟・阪神・淡路、そしてサハリン  
忘れてはならない、他人事ではない「被災地」

#### 〈15〉避難所

阪神・淡路大震災からすでに4カ月半が過ぎているが、依然として被災者の避難所生活は解消されていない。5月末には兵庫県内の避難所は3万人を切ったが、3万人といえば平群町の人口の約1.5倍にもあたる。私の勤務する尼崎市でも避難者は1月18日の9,494人をピークに2月25日には76カ所3,128人に減少したが、5月30日でも11カ所179人が避難所暮らしを続けている。当初市職員は12時間交替で学校・公民館・地区会館などの避難所勤務についた。私の勤務する地域研究史料館でも1月21日～2月3日の2週間に9回ほど避難所勤務にあたっている。その後もしばらくは週に4回程度勤務についている。私も1月26日に初めて勤務についた。

避難所は当初学校の体育館が充てられることが多かつた。学校・公民館等施設の管理側も大変だった。私が着任した時には、すでに震災直後の混乱した雰囲気は薄らいでいた。食事・水・毛布等の緊急物資や各地からの救援物資の配布、情報の提供等はある程度軌道にのってお

り、臨時電話も設置されていた。水道が復旧する前はプールから水を汲んでトイレ用水にしていた。

日中勤務は9時～21時、夜勤は21時～9時。学校避難所の場合、まず着任報告を校長・教頭先生にする。前任者から引継ぎを受け校務員や夜勤の先生を紹介される（夜勤は基本的に学校側・行政側各1人）。避難所の巡回、1日2回の食事の配布（朝食はパンと牛乳、夕食は当初おにぎりやご飯と漬物・佃煮等の弁当とお茶が多かったが、次第におかず付の弁当になつていった）、各種生活物資・各地からの救援物資の配布、連絡事項の伝達・掲示、要望やトラブルの解決、ストーブへの給油など。

避難所によっては、避難者が掃除・ゴミ捨て・物資の管理など自分達のできることを自主的に行っているところもあった。私の勤務した尼崎市北西部武庫地区の2つの小学校では湯沸かし・電熱器等多くの家電製品の同時稼働により避難所になっている体育館の電源が切れたり、避難者ではない青少年が溜り場にしたり（教頭先生と夜勤の先生と私が面談して説明の上出でもらった）、酔っ払いが乱入したりといったトラブルがあった。

避難所となった学校では、体育館に避難所がある間は体育の授業は校内ではグラウンドや武道場でしか行えなかつた。学校では、3月の卒業式前に避難所を体育館から別の教室に移すことが多かつた。校舎が危険になった学校が丸々空き教室に移ってきた学校もあった。避難者が減少してくると、避難所勤務は夜間のみ（18～8時）となり、避難所は4月末には学校以外の地区会館・公民館等11カ所に集約された（この後、尼崎市では6月15日避難所を閉じた）。

### 【第5号・1995年6月13日発行】

震災から5カ月歴史と文化をいかしたまちづくりをめざして

#### 〈16〉文化財の被災と被災史料の救出

阪神・淡路大震災では多くの文化財に被害が生じた。文化財とは何も国や都道府県・市町村が指定した珍しい高価なものだけではない。指定されていない歴史的・文化的に意義のある建築物・資料・物品・景観・民俗などはもちろんのことより生活に密着した民家・道具・土地利用・水利慣行なども広い意味で地域文化の産物としての文化財といえないか。

文化財は地域文化のよりどころとして永く守り続けていかねばならない。

今回の震災では、いわゆる「指定文化財」のほかに「広い意味での文化財」が被害を受けている。しかも指定にもれたものは公的な助成を受けることはまずない。

尼崎市内では寺町本興寺方丈・開山堂など寺院建築物のほか近松門左衛門墓・西武庫須佐男神社十三重石塔など指定文化財15件が被害を受けた。しかし、広い意味での文化財はどれだけ被害が出たかもわからない。日々貴重な史料や民家が失われていいっているのである。

尼崎市内の古文書や明治以降の文書類・地図・写真その他の記録史料については、私の職場である市立地域研究史料館が所在のわかつている史料の安否を調査、被災した歴史資料の廃棄保留・提供・情報提供を呼びかけた。

被災史料の広域的な救出活動には、主に3つの組織が活躍した。まず震災直後に設立された地元N G O救援連絡会議の1部門として文化情報部がいち早く1月31日に発足した。中心となったのは、東京の史料修復専門家の坂本勇氏である。復興の精神的なりどころとなる地域住民の生活に密着した記録・チラシ・地図・アルバム等も含めた、歴史資料・文化遺産全般の廃棄防止・救出を目的とし、地元N G Oのほかの部門・ボランティアグループと連携しつつ活動を展開した。その後ボランティア活動の記録など震災以後に発生したさまざまな記録史料の調査・収集を目的とした地元N G O救援連絡会議記録室が発足し活動を開始している。

阪神大震災対策歴史学会連絡会は、2月4日に日本史研究会・大阪歴史学会など歴史研究4団体によって設立(のち3団体加入)、2月13日には尼崎市立地域研究史料館内に歴史資料保全情報ネットワーク(史料ネット)が開設された。被災史料についての情報提供・救出の依頼・相談の受付・ボランティア登録を開始、大学院生クラスを中心として救出活動を展開、5月6日には尼崎市総合文化センター・アルカイックホールオクトで阪神・淡路大震災歴史と文化をいかす街づくりシンポジウムを開催した。

阪神・淡路大震災被災文化財等救援委員会は、文化庁を中心に全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(全史料協)・全国美術館会議・古文化財科学研究会・日本文化財科学会の4団体が参加し組織した。救援委員会は、文化財レスキュー事業として震災で損壊した県内の社寺・個人住宅・博物館等に所在する貴重な文化財等の廃棄・散逸を防止するため、所有者の要請に応じて応急措置及び博物館等における一時保管を行うことを目的に組織された。2月17日に神戸市西区の神戸芸術工科大学に現地本部を設置、兵庫県教育委員会と協力して救出活動を開始、4月1日には尼崎市立地域研究史料館内に移転、4月27日に活動を終了した。文化財等の一時保管期間(半年間)は東京国立文化財研究所に事務局を設置して存続の予定。

以上3団体は相互に、また各自治体と連携をとりながら被災史料の救出活動を展開した。ボランティアの活躍もめざましかった。このほか、埋蔵文化財関係救援連絡会議の働きかけによる埋蔵文化財保全の動きや日本建築学会による歴史的建造物の被災状況調査、各地でのまちづくりシンポジウムの開催など、被災地の文化を守り、地域の文化を活かした復興をめざす動きが活発化している。

被災地の復興はただ建物を建て、鉄道や道路を復旧させるといったハード面だけでなく、住民の意志を尊重し、地域性や環境、文化的土壤に十分配慮したまちづくりで

なければならない。災害考古学の成果や地形・地質・都市文化と災害との関係など、歴史や自然に学ぶことは今後の防災都市建設のために必ず役にたつことだろう。

#### 【臨時号4・1995年6月20日発行】

##### 〈17〉 西宮そして神戸

私がはじめて勤務地である尼崎市以外の被災地に足を踏み入れたのは2月17日の西宮市の阪急西宮北口駅近くの高松町だった。尼崎とは格段に違う被害を目の当たりにして絶句した。このことを記録として後世に残さねばならないと史料保存施設職員根性丸出しながら人のいない時を見計らって写真を撮り続けた。次に避難所への夜勤明けに伊丹市野間へ。続いて西宮市甲東園近辺に住む史料館員を訪ねるために尼崎市内から武庫川(甲武橋)を渡って歩いた。街一面が被災しており、一部では取り壊しも始まっていた。潰れた家々が続くなかを歩き続けると何とも滅入ってくる。まして被災地の方々の心中いかばかりか。

3月4日、初めて神戸へ。被災と復興と入り混じるなか、被災地の文化財等を訪ねた。忘れないのは、焼け跡の光景である。

何にせよ、反省すべき点は反省し、震災を記録し、また記された記録を保存・分析し、防災都市の構築のために役立てねばならない。忘れてはならない。他人事ではない震災の光景である。

#### 【臨時号5・1995年6月26日発行】

##### 〈18〉 焼け跡の光景

忘れてはならない  
この光景を

多くは語らない  
この光景が  
すべてを物語っている

忘れては  
ならぬい  
この光景を

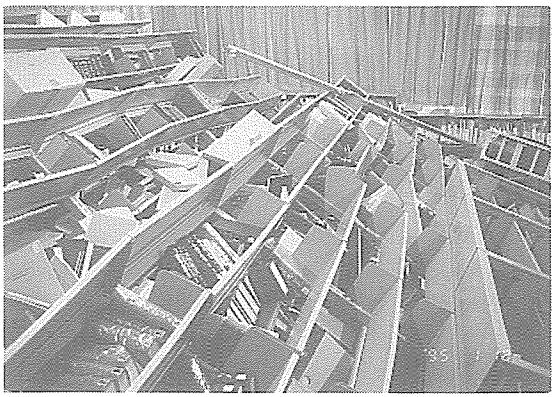


写真1 尼崎市立地域研究史料館書庫 書架の倒壊  
(1995年1月18日)

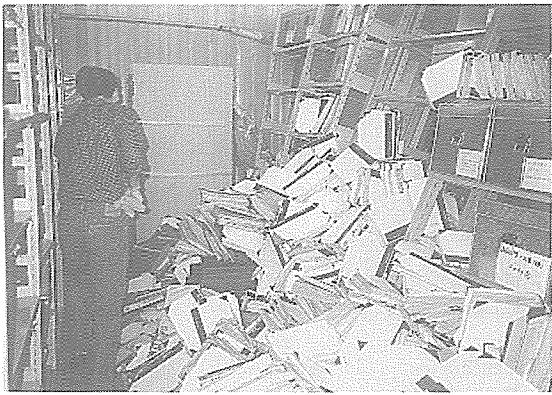


写真2 史料館文書庫の散乱した史料(1995年1月19日)



写真3 本の洪水の中全史料協近畿部会有志ボランティアも  
加わって復旧作業は続いた(1995年1月22日)



写真4 尼崎市築地南浜1丁目初嶋大神宮(1995年1月28日)



写真5 尼崎市西昆陽(にしこや)須佐男神社拝殿倒壊(1995年2月2日)



写真6 尼崎市南武庫之荘5丁目のマンション(1995年1月27日)



写真7 全壊家屋の前で主人の帰りを待つ猫  
西宮市神呪(かんのう)字中谷(1995年2月28日)



写真8 焼け跡の光景 神戸市灘区琵琶町1丁目(1995年3月18日)

# 雑誌・新聞情報

雜誌

掲載目次のうち太字で書かれたものについて  
は20・21ページに記事紹介を掲載してあります。

## 目次紹介

### 「行政とADP」社団法人 行政情報システム研究所 TEL (03)3438-1678



VOL.32  
NO. 3  
1996年3月号  
(通巻373号)



VOL.32  
NO. 4  
1996年4月号  
(通巻374号)

- <随想>
- 政府審議会をガラス張りに
- <パネルディスカッション>
- これからの行政情報化を進める視点
- <平成8年度情報システム関係予算案等の状況>
- <行政情報化とレコードマネジメント>
- <行政手続法の施行状況に関する調査結果について>
- <インターネットを利用した生涯学習情報センターへ>
- <政治・経済を見つめて(176)>
- 橋本首相は中曾根元首相を超えるか
- <平成6年度利用研／調査研究報告(7)>
- UNIX対応のアプリケーションについて
- <システム化のコツ(28)>
- コミュニケーションの基本⑦
- <System's Eye>
- インターネット雑感—その3
- <インターネットのポイント(10)>
- FTPによるファイルの転送
- <都市に関する断章 第48回>
- <とーく &topics>
- <波瀬万丈 第46話>
- <最近の動き>
- <IAISインフォメーション>

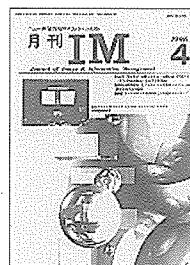
- <随想>
- 自分探し
- <災害情報を社会化するために(1)>
- <ICAの第29回年次総会に参加して>
- <オンラインによる文書管理システム>
- <高度情報通信社会推進本部の最近の動き>
- <行政の内と外の情報体質の革新(1)>
- <「住民登録システムのネットワークの構築等に関する研究会」報告書のポイント>
- <政治・経済を見つめて(177)>
- どこで狂った公僕の精神
- <平成6年度利用研／調査研究報告(8)>
- 文書処理のための自然言語処理技術の応用と将来動向
- <システム化のコツ(29)>
- 『ビジョン』を創造できる環境づくり
- <System's Eye>
- Windowsやインターネットとどう付き合うか？
- <インターネットのポイント(11)>
- インターネット・ナビゲーションツール
- <都市に関する断章 第49回>
- <とーく &topics>
- <波瀬万丈 第47話>
- <最近の動き>
- <IAISインフォメーション>

# 「月刊 IM」 社団法人 日本画像情報マネジメント協会

TEL (03)3254-4671・4672



1996-3月号  
第35卷第3号  
(通卷302号)



1996-4月号  
第35卷第4号  
(通卷303号)

## <ケース・スタディ>

- 埼玉県立文書館地図センターにおける地籍図等のカラーマイクロフィルム撮影について

## <連載 第3回・最終回>

- マルチメディア時代のデジタルとアナログ技術の展開

## <連載「インターネットが切り開く21世紀のフロンティア」>

- 第3回「新たな富を創造するサイバースペース」

## <訪問記>

- 電子記録のアメリカ

—記録センターと文書館をみる—

## <コラム 見たり聞いたり(27)>

- 宗教と世相

## <ニュース・アラカルト>

- KIU新春賀詞パーティー

- マイクロフィルム利用促進の特別委員会設置(AIIM)

- 渡口社長考案の文書保存箱 日本でも特許確定

## <随想>

- 人生の選択

## <JIIMA NEWS>

- 第35期第4回理事会

- 第34期事業報告書

- 第35期事業計画

- 第35期第5回理事会

- 第35期役員の職務分担表

- 第35期第6回理事会

## <IM編集委員から>

## <ケース・スタディ>

- 品質システムと品質記録

—TQCとISO 9000の融合によるPLP活動—

## <ARMA講演報告>

- 電子ドキュメント管理システムへの情報管理手法の展開

## <連載「インターネットが切り開く21世紀のフロンティア」>

- 第4回「知恵とアイデアで勝負する起業家たち」

## <随想>

- 「虚実の間」

## <新製品紹介>

- フジフィルムカレイダ36、同24

- フジフィルムコピアート500

- 汎用保管箱と新聞／一枚物用保存箱

- コダックデジタルカメラDC50ズーム

- 医用分野むけデジタルイメージファイル

- フジフィルム3.5型540MB、640MB MOディスク

## <Topics>

- IMC、AIIMと力を合わせる

—AIIMは名前をAIIMインターナショナルに変更—

## <ニュース・アラカルト>

- 富士フィルム'96 Total Image Managing System事例／新製品発表会

- KIP製品システム機器内覧会

- インターネット上のBIS関連情報

- 「台湾教育会雑誌」発刊

- キャノン人事

- 企業の危機管理についても言及「兵庫地域研究」3号

## <コラム 見たり聞いたり(28)>

- 言葉と教育

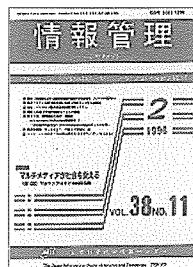
## <JIIMA NEWS>

- 第35期第7回理事会議事録

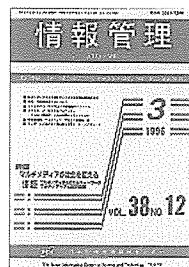
## <IM編集委員から>

# 「情報管理」 特殊法人 日本科学技術情報センター

TEL (03)5214-8415



VOL.38  
NO.11  
Feb. 1996



VOL.38  
NO.12  
Mar. 1996

- 講演：図書館における定期刊行物の効果的な発注管理—アメリカの現場から
- 報告：フランス国立図書館における資料デジタル化計画
- 報告：バイロット電子図書館実証実験システム
- 解説：JOISでの漢字検索サービスの開始
- 論文：統・科学技術の興亡 最終回  
21世紀へ向けた科学技術の構造改革(3)  
—19世紀末の主要国における科学技術の構造改革とその教訓—
- 講座：マルチメディアが社会を変える  
[第10回] マルチメディアと知的所有権
- 情報整理術：やってみよう！手作りの情報化 47
- マンガ「ことばの泉」：知る知る見知る  
クライアントサーバシステム
- 図書紹介
- Pin up
- 新刊科学技術雑誌紹介
- JICST通信
- 海外文献紹介
- 編集後記

- 講演：ディジタル情報とディジタル図書館の将来の価値
- 解説：科学技術基本法について
- 講座：マルチメディアが社会を変える  
[第11回] マルチメディアを支えるネットワーク
- 講座：マルチメディアが社会を変える  
[第12回] マルチメディアと国家施策
- ぶろむなーど：WWW上の科学技術データベース
- ぶろむなーど：社史をめぐるアレコレ  
その20(最終回) 社史の世界から生まれたもの
- 情報整理術：やってみよう！手作りの情報化 48
- マンガ「ことばの泉」：知る知る見知る  
ターミノロジー
- 図書紹介
- Pin up
- JICST通信
- 海外文献紹介
- 編集後記
- 卷末索引

## 『阪神・淡路大震災 歴史と文化をいかす街づくりシンポジウム 記録集』

編集・発行 阪神大震災対策歴史学会連絡会・歴史資料保全情報ネットワーク



昨年1995年5月6日に尼崎市総合文化センターにおいて開催されたシンポジウムの記録である。

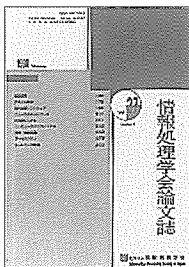
歴史、考古、都市計画、建築学など様々な分野の研究者からの報告と提言に加えて、諸団体による被災史料救済活動のデータも網羅し、身近な文化財の保存について示唆に富むディスカッションの記録及び出席者の感想も掲載されている。

[1995.5.25 B5判 61頁 500円(送料300円)]

問合せ・申込み 日本史研究会 TEL(075)256-9211/FAX(075)256-9212

# 「情報処理学会論文誌」 社団法人 情報処理学会

TEL (03)5484-3535



VOL.37

1996

NO. 2



VOL.37

1996

NO. 3

## <知識獲得>

- ID3-GAによる非独立性属性データ問題へのアプローチ

## <テキスト処理>

- 字面解析による日本語動詞抽出手法

## <並列処理ソフトウェア>

- 実時間並行ソフトウェアの仕様記述と検証

- 分散メモリコンピュータにおける通信レイテンシ最小化手法

## <ニューラルネットワーク>

- 入力領域適応型ニューラルネットワーク  
- 変換に対して耐性のあるニューラルネットワーク -

## <対話型システム>

- An Interactive System Implementation for Constructing Cat's Cradle Diagrams and its Evaluation

## <コンピュータグラフィックス>

- ベジェ形式曲面の法線ベクトルとその存在域

## <画像・図形処理>

- 3次元紐图形表現方法を用いた編物パターン処理について

- 測量データに基づく河川の三次元モデルと描画アルゴリズムの研究

- 入力推定型逆問題の色再現への応用

## <アーキテクチャ>

- Reusing TLB Entries for Virtual Machines in Processor Switching

- ディレクトリ型キャッシュコヒーレンスプロトコルの性能評価

## <ネットワーク管理>

- パソコンLANシステム構築支援ツール：  
Easy Installer

## <人工知能>

- ルールと事例を用いた統合化推論の一手法

- ネットワーク資源割当問題向き協調問題解決手法

## <自然言語処理>

- 表層レベルにおける電子化辞書の情報構造

## <メディア情報処理>

- Tactile Display Presenting a Surface Texture Sensation

- 絵画生成のモデル化に関する一考察

## <ロボットビジョン>

- 幾何学的補正問題の最適計算と精度の理論的限界

## <言語処理系>

- インクリメンタルなLR構文解析の一方式の提案とその評価

- 属性値予測による1パス属性文法の評価法

## <ソフトウェア工学>

- ドメイン分析に基づく仕様再利用手法

## <設計自動化>

- 固有初期伝播法を用いた部分スキャン回路のテスト生成

## <並列処理>

- 共有メモリ型マルチプロセッサシステム上でのFortran粗粒度タスク並列処理の性能評価

- 離散事象並列シミュレーションにおける効率的なメッセージ送出則

## <ネットワーク>

- Networking Architecture for Multimedia Services on a Distributed Processing Environment

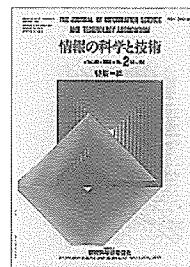
- ISOで開発したトランスポートプロトコルの適合性試験スイートの質の評価

# 「情報の科学と技術」 社団法人 情報科学技術協会

TEL (03)3813-3791



VOL.46  
1996  
NO. 1



VOL.46  
1996  
NO. 2

年頭挨拶：年の始めに

特集=コンピュータ・コミュニケーションの現在

●特集「コンピュータ・コミュニケーションの現在」  
の編集にあたって

●コンピュータ・コミュニケーションの将来

●動画像転送技術とテレビ電話の現状

●音声認識技術の現状

●機械翻訳の現状—日英及びその他の言語—

●電子メールとキャンパス・コミュニケーション

●パイロット電子図書館プロジェクトについて

●連載：サーチャーのためのワンポイントアドバイス

② 製薬分野の調査

●連載：インターネット活用術①

国内OPACリストの作成と情報共有

●INFOSTA Forum

●協会だより

●編集後記

特集=紙

●特集「紙」の編集にあたって

●素材としての紙

●紙とドキュメンテーション

●電子メディア環境の拡大と紙メディアの役割

●紙メディアとハイパー・メディアの共生

●落陽の「紙」価を責めた情報革命

●連載：サーチャーのためのワンポイントアドバイス

② 特許審査データからの検索

●連載：インターネット活用術②

オンラインによるインターネットの使い方講習会

●INFOSTA Forum

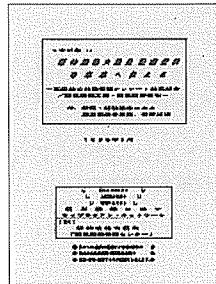
●新刊紹介

●協会だより

●編集後記

## 『〈資料集1〉阪神・淡路大震災記録資料を未来へ伝える』

編集・発行 震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク



阪神・淡路大震災は新聞、雑誌、書籍、地図、チラシ、パンフレット、写真、ビデオなど多様なメディアによる膨大な資料を生み出した。大地震の「歴史証言」ともいべきこれらの資料をそれぞれの地元図書館で分担して収集、保存し一点でも多く後世に伝えようと活動しているのが「震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク」である。

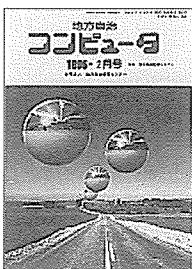
本書には、被災地である阪神間、大阪、京都の主だった公共図書館17館に対して行なった震災記録の収集、所蔵状況に関するアンケート調査の結果がまとめられている。

また、あわせて昨年12月までに発行された約400点にのぼる震災関係図書とともに雑誌記事索引も掲載されている。

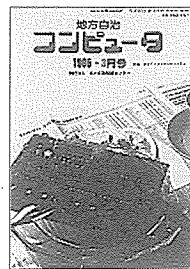
[1996.1.17 A4判 158頁 2000円]

問合せ・申込み 阪神淡路大震災「震災記録情報センター」  
TEL(078)857-8760/FAX(078)857-8761

# 「地方自治コンピュータ」 財団法人 地方自治情報センター TEL (03)5214-8004



VOL.26  
1996-2月号  
NO. 2



VOL.26  
1996-3月号  
NO. 3

## <随想>

- 「とちぎ新時代の創造と情報化」
- <特集／優秀情報処理システム>
- 茨城県企業局財務会計システム
- 土木積算システム
- 消防学校教育訓練システム
- 総合運営管理システム
- パソコン通信ハローネットとやま
- 税務申告受付システム
- 上山市財務会計システム  
－高機能電子決裁及びペーパーレスシステム－
- 企業会計オンラインシステム
- 西宮市福祉総合情報システム
- 時間外電算処理自動化システム
- 文書管理システム
- 行政委員管理システム

## <トピックス>

- パーソナルコンピュータによる拡張漢字処理方式の標準化に向けて  
－Windows NT™漢字処理技術協議会の活動状況－

## <時の動き>

- システム開発取引共通フレームの意味

## <今日は！>

- 一関市企画調整課です
- 生駒市文書課です

## <健康情報>

- 成人呼吸促迫症候群

## <まとりくす>

- 戦後・人生・50年

## <情報管理室からのお知らせ>

## <地方自治情報センターからのお知らせ>

- NIPPON-Netからのお知らせ
- OAライブラリィ・メールサービスの御案内
- 人事異動について

## <編集後記>

## <随想>

- 区政と高度情報化
- <特集／クライアントサーバシステム>
- 奈良県における財務会計システムについて
- クライアントサーバ方式による保健医療・衛生情報システム
- クライアントサーバ方式による神戸市土木積算システムについて
- 足立区のCSSによる文書管理システム
- CSSによる住民情報・税情報システムについて
- クライアントサーバによる府内OAシステムについて
- クライアントサーバ方式による学校事務のネットワーク化
- パソコンLANによる人事・給与システムについて
- クライアントサーバシステム適用にあたっての基本的事項

## <トピックス>

- 「地方自治体コミュニケーションフォーラム'95」
- 「インターネットによる文明構造・文化概念の変容と情報セキュリティ」
- 「富山県における地域ネットワークの構築と今後の展開について」
- 「災害時にインターネットの果たした意義と課題」

## <時の動き>

- たかがパソコン、なれどパソコン

## <今日は！>

- 東村山市電子計算課です
- えびの市電算課です

## <健康情報>

- 高齢者の尿失禁

## <まとりくす>

- 男の更年期

## <情報管理室からのお知らせ>

## <新刊紹介>

- 道標なき道を－行政事務OA化への飽くなき挑戦－
- <地方自治情報センターからのお知らせ>

## <入会の御案内>

- 事務所移転の御案内

## <教育研修について>

- NIPPON-Netからのお知らせ

## <「地方自治コンピュータ」主要目次>

## <編集後記>

# 雑誌記事紹介

## 行政情報化とレコードマネジメント

㈱オフィス総研取締役・ARMA東京支部会長 小谷允志

行政情報化推進基本計画に沿って各省庁では、パソコン導入が急ピッチで進み1人1台の環境が整いつつあるという。基本計画で謳われている「紙」による情報の処理から通信ネットワークを駆使した電子化された情報の処理への移行が、現実のものになろうとしている今、課題となると思われるいくつかの問題をレコードマネジメントとの関連において以下のように述べている。

### 1. 情報化の問題点と課題

オフィスを占領する紙文書／電子メディアの増加／ネットワークでの情報活用

### 2. レコードマネジメントの概要

レコードマネジメントの定義／レコードマネジメントの目的／レコードマネジメントのコンセプト／なぜレコードマネジメントか？－10の理由－

### 3. レコードマネージャーについて

「行政とADP」3月号

## UNIX対応のアプリケーションについて

工業技術院総務部総務課電子計算機利用技術開発室

コンピュータの利用形態が、集中処理システムから分散処理システムへと変化し、様々な機種でUNIXが大きな支持を得ているという。なぜ、UNIXシステムが支持されているかという観点から、UNIXシステム上のアプリケーションについて調査・研究を行い、以下のように報告している。

### 1. はじめに

### 2. オープンシステム環境におけるアプリケーションのあり方

### 3. UNIX対応のアプリケーションの調査結果

「行政とADP」3月号

## 埼玉県立文書館地図センターにおける地籍図等のカラーマイクロフィルム撮影について

埼玉県立文書館主査 河田重三

埼玉県立文書館では地図資料の収集、整理、保存、及び利用を目的に平成4年11月に全国の地方公共団体では唯一の地図センターを開設したという。開設の経緯とセンターで行なっている地籍図等のカラーマイクロフィルム撮影について紹介している。

### 1. はじめに

### 2. 明治前期作成の地籍図の保存状況

### 3. カラーマイクロフィルムによる撮影

保存状況調査／資料調査／撮影／複製

### 4. 利用

「月刊IM」3月号

## 電子記録のアメリカ

### －記録センターと文書館をみる－

国際資料研究所 小川千代子

アメリカでの電子記録への対応は相当に進んでいるのではないかと期待した筆者は、昨年秋、文書課、文書館、記録センターと、北米大陸東側をたずねて見て歩いたという。以下の順に訪問した場所と感想をまとめている。

- ・SAA第56回大会での電子記録とアーカイブ検索  
電子記録と関連技術に高まる関心
- ・第31回CITRA国際文書館評議会円卓会議
- ・第31回CITRAポスト・コンファレンス・セミナー
- ・ウィンザー市役所文書課の電子化プロジェクト
- ・ロチェスター市役所記録センターのコンピュータ利用とマイクロ化事業

### ・旅のおわりに

「月刊IM」3月号



## ニュース・アラカルト

### 渡口社長考案の文書保存箱、日本でも特許確定

沖縄マイクロセンター

沖縄に自生する植物サンニン(月桃)から作った文書保存箱とアルミの整理箱を組み合わせたファイリングシステムで沖縄マイクロセンターは、アメリカに続いて日本でも特許を取得したという。

この箱は、軽くて丈夫、ワンタッチで組み立てられつなげて書架にもなり、腐食やカビに強いという特長を持ち、文書やマイクロフィルムの保存に適しているという。

「月刊IM」3月号



## 品質システムと品質記録

### －TQCとISO9000の融合によるPLP活動－

松下精工株式会社換気空質事業部 松井博武

松下精工(㈱)の事業部、春日井工場では1994年にISO9001の認証取得を目指し標準化を発展させ、同時にPLP対応の品質記録管理システムを構築し、その事例を以下のように紹介している。

- 1. はじめに
- 2. TQC活動の概要
- 3. ISO9001認証取得活動の位置付け
- 4. ISO9001s認証取得の目的
- 5. 品質システムと品質記録
- 6. 製品安全体制と文書管理の関連
- 7. マイクロフィルム採用の経過
- 8. 導入後の状況と効果
- 9. 導入時の課題と今後の展開

「月刊IM」4月号



## 電子ドキュメント管理システムへの情報管理手法の展開

NECパーソナルC&Cマーケティング本部 小林秀彦

1995年10月、米国テネシー州ナッシュビルで行われたARMA(記録・情報管理協会)インターナショナル第40回年次大会で講演した筆者の講演内容を紹介している。

- 1.はじめに
- 2.我が国における情報管理発展の背景
- 3.情報管理手法の電子ドキュメント管理システムへの適用
- 4.まとめ

「月刊IM」4月号

### 汎用保管箱と新聞／一枚物用保存箱

日本マイクロ写真株式会社

新製品紹介のページのなかで汎用保管箱『もんじょ箱』④と新聞／一枚物用保存箱⑤を紹介している。どちらも中性段ボール（アーカイバルボードpH8.5）を使用し、使わないときは畳んでおける。また、強度は一般段ボール箱の2～3倍あり重ねられるという。用途と特徴だけでなく、サイズ、価格、問い合わせ先などわかりやすくコンパクトに紹介している。

「月刊IM」4月号

### フランス国立図書館における 資料デジタル化計画

ルヌー・D著 杉本重雄訳

フランス国立図書館では、主要なプロジェクトの一つとして、冊子体の書籍、画像資料、オーディオ・ビジュアル資料の電子的コレクションの形成とアクセスのための資料デジタル化計画を進めているという。1990年に始まった資料デジタル化計画は、科学諸分野、フランス文学と歴史分野の資料の広範なコレクションを形成することを基本とし、これまでの予備的な研究から、図書館においては図書の蓄積に際してページイメージを用いることが最も経済効率がよいことがわかっているという。

「情報管理」2月号

### パイロット電子図書館実証実験システム 情報処理振興事業協会技術応用事業部 田屋裕之

情報処理振興事業協会では、地球上に広く分散して個々に収集・蓄積されている知的資源を、ネットワークを通じてアクセス可能とする実験的な情報基盤として、パイロット電子図書館システムプロジェクトを実施しているという。本プロジェクトを構成する総合目録プロジェクトと電子図書館実証実験プロジェクトの2つのサブプロジェクトとパイロット電子図書館の今後について紹介している。

「情報管理」2月号

### デジタル情報とデジタル図書館の 将来的価値

レスク・マイケル・E

1995年11月に金沢工業大学ライブラリーセンターの主催により開催された金沢工業大学・図書館、情報科学に関する国際ラウンドテーブル会議の講演をまとめたもの。

デジタル技術の発展は図書館の役割および管理方法に大きな変化をもたらそうとしているという。そのような状況の中で、デジタル情報はどのような価値を生み、図書館およびその利用者にとってどのような

メリットがあるのかを、デジタル技術を駆使した様々なシステムの紹介や、研究調査における有効性の実験などを通して述べている。また図書館がデジタル図書館へ変貌したとき、社会において果たすべき役割とは何か、図書館の将来についても述べている。

「情報管理」3月号

### 素材としての紙

紙の博物館 小宮英俊

コンピュータ時代はペーパーレス社会になると言われたが、OA機器の普及に伴い紙の消費量はむしろ増えているという。素材としての紙について以下の順に詳しく説明している。

- 1.紙は人類社会の必需品
- 2.紙が発明される前は何に書いて来たか
- 3.紙の発明
- 4.記録材料としての紙 「情報の科学と技術」2月号

### 洛陽の「紙」価を貴めた情報革命

東京経済大学コミュニケーション学部 田村紀雄

情報革命はむしろ、媒材としての「紙」価をたかめたと考える筆者が以下のように紙について考察している。

- 1.「紙」を超えるディスプレー媒材はない
- 2.「紙」は地上至るところで製造可能
- 3.「紙」がもつ座標軸・利用の多目的性
- 4.紙と電子的ディスプレーの特性のちがい
- 5.情報流通の「鎖」と変換・加工・処理労働
- 6.「紙」をめぐる人材養成

「情報の科学と技術」2月号

### 足立区のCSSによる文書管理システム

足立区総務部総務課文書事務改善主査 石垣則泰

平成8年5月の新庁舎移転に伴って、文書管理システムを構築することになった足立区のCSSによる文書管理システムについて紹介している。

- 1.クライアントサーバシステム導入の経緯
- 2.システムの概要
- 3.システムの構成
- 4.システムの特徴
- 5.導入効果
- 6.今後の課題及び展望

「地方自治コンピュータ」3月号

# 新聞

文書管理または情報公開、文書館に関する見出しを掲載しました。  
太字の記事については次ページに抄録を掲載しております。

発行日	新聞名	記事見出し
H.8.1.25	下野新聞	栃木市の情報公開制度利用 3カ月でわずか2人 態勢整備も関心マイチ
H.8.1.26	毎日新聞(朝)	県民オンブズマンの会 監査委の情報公開請求 全国統一行動 (※編集室註 静岡県)
H.8.1.26	自治日報	官庁への提出書類を電子化 政府の指針
H.8.1.28	下野新聞	北海道庁の農政、土木部 要保存の文書大量廃棄 管理ずさん、情報公開支障
H.8.1.30	日経産業新聞	仮想書類棚システム 三井東圧、パソコンを活用 契約書など自由に閲覧
H.8.1.30	下野新聞	超耐水コピー用紙販売 小山の「サイトウ」 悪条件下の記録保存に
H.8.1.31	静岡新聞(夕)	会議公開条例制定へ研究委 川崎市が設置
H.8.2.1	日経産業新聞	富士ゼロックスが文書管理複写機 紙あれば端末いらない? 用紙送ると出先に出力
H.8.2.2	静岡新聞(朝)	肩書や氏名は非公開 情報公開と保護条例 官官接待で基準示す 静岡市
H.8.2.2	読売新聞(朝)	米コダック、富士フィルムなど共同開発 新写真システムを公表 磁気データも記録
H.8.2.2	中日新聞(朝)	オンブズマンSOS 「日本一高い」県公文書コピー代に悲鳴 (※編集室註 愛知県)
H.8.2.6	中日新聞(朝)	明治の貴重な資料展示 県図書館 マイクロフィルム複写 (※編集室註 愛知県)
H.8.2.6	朝日新聞(朝)	情報を市民に〈11〉: 第1部 公開法制定の論点 =「手数料」= 公益目的でも請求者持ち
H.8.2.7	朝日新聞(朝)	情報を市民に〈12〉: 第1部 公開法制定の論点 =「著作権」=「乱用」の主張認められず
H.8.2.9	読売新聞(朝)	住専資料開示の教訓 「非公開扱い」避けたい『絶対化、行革委検討の情報公開法
H.8.2.21	読売新聞(朝)	資料コピー代 自治体間で格差4倍 1枚40円!?見えぬ積算根拠 情報公開障壁にも
H.8.2.22	静岡新聞(朝)	浜松市が行革大綱策定 情報公開「8年度めど」明記
H.8.2.29	日経産業新聞	文書管理システム「i-file」 ソニーがNT版
H.8.3.1	自治日報	史料の保存、活用で連絡協議会設立 千葉県
H.8.3.2	朝日新聞(朝)	「知る権利」に積極姿勢 情報公開法で総務庁長官 「明記」には言及せず
H.8.3.5	読売新聞(朝)	民事訴訟法改正要綱案 「情報隠し」助長の懸念 エイズ、住専問題教訓に
H.8.3.6	静岡新聞(朝)	手数料の無料化 現段階で考えなし 公文書開示で県 (※編集室註 静岡県)
H.8.3.7	静岡新聞(朝)	県の不要文書…積めば富士山の3.2倍 本庁と出先でクリーン作戦 (※編集室註 静岡県)
H.8.3.8	下野新聞	情報公開条例制定へ 足利市議会一般質問
H.8.3.13	中日新聞(朝)	民事訴訟法改正、情報公開後退の恐れ PL法無効化も 山口正久四日市大教授に聞く

対象新聞：「静岡新聞」「下野新聞」「中日新聞」「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」「日経産業新聞」「自治日報」

対象期間：1996.1.21～1996.3.20

### 栃木市の情報公制度利用 3カ月でわずか2人 態勢整備も関心マイチ

昨年10月からスタートした栃木市の情報公開制度が4カ月目を迎えたが、昨年10月から12月までの3カ月間の申請者は2人で、申請件数は計11件であることが市総務課のまとめでわかったという。今後、広報などで周知の徹底を図る方針だという。

(下野新聞 1月25日)

### 官庁への提出書類を電子化 政府の指針

マルチメディア社会の実現に向け、各種法制度の見直しを進めている政府の高度情報通信社会推進本部の検討内容が21日明らかになった。制度見直し作業部会は、①中央省庁の民間企業に義務付けている業務記録などの提出について、従来の書類形式から光ディスクなどの電子データに移行する②民間による各種申告・申請手続きを電子化するーの2項目を当面の検討課題としたという。

(自治日報 1月26日)

### 明治の貴重な資料展示 県図書館 マイクロフィルム複写

愛知県図書館が購入した国立国会図書館所蔵の「明治期刊行図書」の資料展が開かれた。国会図書館は明治時代に刊行された約22万冊の本のうち、約16万冊をマイクロフィルム化して保存。県図書館は平成3年度から5年かけて計約1億6千万円でフィルムを全巻購入したという。

(中日新聞 2月6日 朝刊)

### 浜松市が行革大綱策定 情報公開「8年度めど」明記

浜松市は21日までに、今後の市の行財政運営の基本となる「市行政改革大綱」をまとめたという。懸案の情報公開制度について初めて「平成8年度をめど」と明記、8年度早々学識経験者らも含めた「情報公開制度懇話会」を設置することなどが盛り込まれた。

(静岡新聞 2月22日 朝刊)

### 手数料の無料化 現段階で考えなし 公文書開示で県

静岡県の荒木慶司総務部長は5日の県議会で、情報公開制度に基づく公文書の開示手数料を現段階で無料化する考えのないことを明らかにしたという。全国では情報公開制度がない奈良県を除き、43道府県が手数料は無料で、静岡県、東京都、香川県だけが有料となっている。

(静岡新聞 3月6日 朝刊)

### 情報公開条例制定へ 足利市議会一般質問

足利市定例市議会一般質問最終日、早川一夫市長は答弁で、国の情報公開法制定の動きを見ながら、情報公開要綱の条例化を図りたいとの考え方を明らかにしたという。情報公開条例が制定されれば、栃木県内市町村では宇都宮、小山に次いで3市目。

(下野新聞 3月8日)

## 編集後記

今回の特集は、尼崎市立地域研究史料館の白石健二氏に原稿をお願い致しました。氏の「忘れてはならない震災の光景」を初めて目にしたのは、平成7年11月15日～17日に和歌山で開催された第21回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会の会場でした。

白石氏のご好意で、「忘れては～」の全ての号を入手し、多くの方にお読み頂くべきものと確信しました。いま、あの大地震から1年半が過ぎようとしています。（益田耿明）

風薫る新緑の季節を迎えました。年度始めのあわただしさも一段落された頃ではないでしょうか。

さて、国の情報公開法の制定作業は、この秋に行政改革委員会による最終答申を控え、大詰めの段階のようです。行政情報は開示を前提にと市民運動も活発な今、正しい情報公開とは何かが問われているようです。

次号は7月1日発行を予定しております。  
(吉田 真)

## 支援寄付のお願い!!

阪神淡路大震災「震災記録情報センター」はどこかの機関の外郭団体ではありません。独立の非営利ボランティア組織です。

大震災後の1月31日に設立した「地元N G O文化情報部」が前身で、昨年8月1日に「震災記録情報センター」に改組し、多種多岐にわたる震災の記録を兵庫県立図書館フェニックス・ライブラリーなど公共図書館、神戸大学震災文庫、被災地域自治体、震災記録を残すライブラリアンネットワークなどとの収集・整理・保存事業の連携化、オリジナル保存、デジタル化保存などについて様々な技術的支援を海外の専門機関の協力も得ながら行なっております。

震災の記録は今後への防災の教科書であるとともに、直接・間接に多くのものを失った地域・人々の「拠り所」「希望ややすらぎの源泉」にしていかなければならないものと考えます。

震災記録情報センターは日本で最初の文書保存用器機「エンキャプスレーター」の導入など、他でできないような活動を文化遺産保存や震災記録を残すという分野で率先して行なっておりますが、活動費用はすべてメンバーの個人負担と財団などから的小口の助成金で賄われておりますが、維持活動費用が不足する状態が続いております。

日々失われつつある震災の記録を後世に残すための活動にご寄付をお願い申し上げます。

振込口座：「震災記録情報センター」 震災記録情報センター事務局長 坂本 勇  
郵便振替 01130-3-66936 〒658 神戸市東灘区向洋町中6-9 神戸ファッショントマート7F  
TEL(078)857-8760/FAX(078)857-8761

文書管理通信 №26.1996.5-6 (隔月発行)

発行日………1996年5月1日

発行人………渡辺 秀博

発行所………文書管理通信編集室

〒420 静岡市竜南2丁目11-43

クト・オムビル

(株式会社工業複写センター内)

TEL (054) 248-4611

FAX (054) 248-4612

ちゅうせいづきようし 中性抄用紙 (冷水抽出法pH6.5~7.5) 使用

発行部数 1000部